

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時：平成23年4月3日（日）0:30～1:20

場所：東京電力本館1階101AB会議室

先方：記者約50名（カメラ6台）

当方：原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所仮設モニタリングポストによる定点計測状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機プラント状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機原子炉圧力容器周辺温度 [°C]

質疑：

Q. 4号R/Bの溜まり水の事実関係は。

A. 地下1Fから地上への階段室の踊り場あたりまで水が溜まっていた。

Q. 1号の炉圧が上がってきているが。

A. 1号の注水を絞ったことが理由であり、2日20時に7m³から6m³にさらに注水を絞っているためさらに圧力が上がる可能性がある。なお、2号も同時に8m³から7m³に絞った。

Q. 1～3号機の仮設ポンプの電源切替が遅れている理由は。

A. 2号HWからCSTへの移送作業を優先するなど、作業に順序を付けて行っているもの。

Q. 2号のHWからCSTへの移送作業用のポンプを増強しないのか。

A. 20m³/hのポンプの準備をすすめているところ。

Q. 武藤副社長の会見で、格納容器から水は外に出ていない、と発言していたが、その認識が今回のようないくつかの対応の遅れにつながっているのではないか。武藤副社長のコメントをもらいたい。

A. お預かりする。

Q. 今後、冷温停止までどのくらいのスパンを考えているのか。

A. まずはT2/Bの水抜きを行う。その先についてでは、電源関係は先にやっているが、機器の健全性は未確認のため、今後どの程度月日を要するかについては言える段階にはない。

Q. コンクリート車から撮影された写真を見ると、配管が折れている様子が見られる。今後、配管を組み立て直すところからやらないといけないのではないか。

A. R/Bの最上階にはそれほど重要な配管がないと認識。

B

Q. RHR海水系のポンプの電源について、明日中には1～3号機のポンプも外部電源に切り替えるのか。

A. 明日中に切り替える予定。

Q. RHR海水系が復旧してきたが、原子炉側の復旧見込みはどうか。

A. まずはT/B地下の溜まり水を排水して作業環境を整備していくこととしており、現段階では何とも言えない。

Q. RHRの原子炉側の復旧をしたくても線量が高くて作業ができないと説明を聞くが、ロボットの投入は検討していないのか。

A. 現時点ではロボットを投入するとの報告を聞いていない。

Q. 燃料の熱量から考慮して現在の冷却方法でいつ頃100度になるのか。

A. 実際の注水量が分からぬが、 $7\text{m}^3/\text{h}$ で蒸気の発生が安定している。2号機においては、現在、 $9\text{m}^3/\text{h}$ から $8\text{m}^3/\text{h}$ に注水量を減らしている。

S Q. 注水した分が蒸気になっているということは、原子炉から格納容器へ水が漏れているのではないか。

S A. 原子炉が安定するように状況を注視していく。

Q. 原子炉への注水だけで100度まで下げられるのか。

A. 続けていれば緩やかに減少していくと思うが、注水だけでいつ頃100度になるかはお示しできない。

Q. T/B地下やトレーナー、ピットの水は線量が高いが、原子炉の主蒸気配管から水が漏れているのではないか。

A. これらの水は線量が高いので現在の原子炉からの水と考えられるが、流出経路などは確認できていない。

Q. 2号機ピットの水漏れについて、なぜ地震後昨日までパトロールをしなかったのか。
主管部門は原子力設備管理部か原子力運営管理部か。昨日写真をとった際に本当は水漏れをわかっていたのではないか。

A. 津波や余震への心配もあった。昨日、写真をとった際は、2号機の線量が高いことを確認したが、立っている位置からは水は確認できない。

Q. まもなく地震から1ヶ月だが、区切りを迎えて目標を示さないのか。

A. 1日も早く事態を収束させていきたいと考えている。

以上

記者会見概要

日時：平成 23 年 4 月 3 日（日）11:20～12:00

場所：東京電力本館 101 A B 会議室

先方：記者約 50 名（カメラ 6 台）

当方：原子力・立地業務部

広報部

配付資料：

- ・福島第一原子力発電所において行方不明となっていた当社社員について
- ・会長コメント（福島第一原子力発電所において行方不明となっていた当社社員について）

質疑応答：

Q. 二人の検死はいつか。

A. 4月2日。

Q. タービン建屋地下階で発見されたということは、水中にいたのか。発見までの経緯は。

A. その通り。発見までに時間を要したが、余震や津波警報が継続したことや、水素爆発等による規制により現場に近寄れない状況が続いた。その後、ポンプを使った地下階の排水を行いながら、暗闇の中、ボートによる捜索を続けたが、水面が油で覆われ、水中の様子の確認が困難だったこと、足場材などがボートの行く手を阻んでおり捜索できる範囲が限定されていたこと、加えて 24 日の 3 号機タービン建屋での被ばく事故を踏まえ慎重な対応が必要となったことなどから、二次災害防止するために入念に作業を進めたため、発見までに時間がかかった。

Q. 今回の地震によって亡くなった東電社員は初めてか。

A. その通り。

Q. 死因である多発性外傷性ショックは津波が原因か。

A. 詳しい事実関係は分かっていない。

Q. 死亡推定時刻は。

A. 3月11日の16時頃。

Q. ボートを入れて捜索したのはいつからか。

A. 確認させていただく。

Q. 地震によってその場所で作業していたのか。

A. 当日の事実関係については調査しているところ。

Q. 地震発生後に、当該2名の方と連絡は取れたのか。

A. 地震発生直後は中操にいたと聞いている。

Q. タービン建屋地下に行ったことは、誰かが目撃しているのか、それとも聞き取ったのか。

A. タービン建屋地下に向かったという情報があるが、詳細は確認中。

Q. タービン建屋地下に行ったことは周囲の人間は知っていたのか。

A. タービン建屋地下に向かったという情報があるが、詳細は確認中。

Q. なぜ現場に向かったのか。考えられる理由は。

A. 詳細は確認中。

Q. 地震発生から3週間経つが、現場に向かった経緯がなぜ分からぬのか。

A. 福島第一原子力発電所では様々な作業に追われていて、詳細な状況を確認できる状態はない。今後、確認したいと考えている。

Q. 行方不明者を探すのは会社の責務である。従業員からしっかりと話を聞いているはず。分かっている範囲の話だけでも教えてくれ。

A. 4号機タービン建屋の地下階に行ったのではないかという話があった。

Q. 発見時の遺体の状況は。

A. 詳細は控えさせていただきたいが、一人は水面に浮いていて、一人は水が頭を突き出していた後、別のところにひっかがうていったことを確認したと聞いている。

Q. 遺体はかなりの放射能を帯びていたのか。

A. 除染後の線量は、本人から1m離れた所で1マイクロシーベルト以下。これは原子力安全委員会の遺体処分の基準の半分以下の値。

Q. 発見時間が午後3時25分と午後3時53分だが、それぞれどちらがどの時間に発見されたのか。

A. [REDACTED]を午後3時25分に、[REDACTED]を午後3時53分に発見した。

Q. 現場では何の作業をしていたのか。

A. パトロールや確認作業をしていたかも知れないが、詳細は確認中。

Q. 死亡確認は病院で実施したのか。

A. 当社の契約医の方が実施した。

Q. 他に東電社員の行方不明者はいないのか。

A. 現時点ではない。

Q. 4号機タービン建屋地下の線量はどの程度か。

A. 露天気線量で1ミリシーベルト程度と聞いている。

Q. 4号機タービン建屋地下は全体に水があったのか。

A. 水位がどの程度あったかは把握していないが、排水によって徐々に水位が下がったと聞いている。

Q. 排水は捜索のために水抜いたのか。

A. 捜索のために、このフロアの水を復水器の逆洗弁ピットの中に海水を入れて水位を下げて、かつボートを使用した。

Q. 緊急時の行動マニュアルでは、タービン建屋に行くことになっていたのか。

A. 地震後の点検マニュアルでは地震の大きさによって計器で判断したり、現場を含めた点検方法が定まっている。今回は原子炉自動停止したので、決まりとしては現場に行くことになっていた。

Q. なぜこのタイミングの発表になったのか。

A. ご遺族への対応を第一に考えて、このタイミングでの公表にさせていただいた。

Q. ご遺族の対応とはどういうことか。2名が行方不明という情報は会社から発信されていたので、発見した段階で一報を出すべきではないか。

A. ご遺族の方がご対面できていなかった。公表することも含めてご相談させ

ていただいた。

Q. 二人の遺体の距離は。

A. それ程離れていなかった。タービン建屋の一つのフロアの中で発見した。

Q. 津波警報発報の際のマニュアルはあるのか。

A. 確認させていただく。

Q. 津波警報をどのように社員に伝えていたのか。

A. 確認中。

Q. 原子力安全・保安院や官邸には死亡の連絡は伝えたのか。

A. 伝えている。

Q. ではなぜメディアや国民に伝えないのか。

A. ご遺族の意向をふまえて、できるだけ早い情報公開に努めた結果がこのタイミングになった。

Q. 地震後に現場に行ったのはこの2名だけか。

A. タービン建屋地下だけでなく、現場に向かった者は他にもいる。

Q. 他の方は津波の被害にあったのか。

A. 津波の被害にはあっていない。

Q. タービン建屋の溜まり水は津波の水か。

A. 津波の水と考えている。

Q. 2人の性別は。

A. 男性。

Q. 三人をタービン建屋地下に行こうように指示した人はいるのか。

A. 詳細は確認中。

Q. 地震の後にタービン建屋地下に行った作業員はどの程度いるのか。

A. 確認中。

Q. 助かった他の作業員と二人の違いは何なのか。

A. 確認中。

Q. 発見と回収したのは誰か。

A. 当社社員。

以 上

※ 遅くなりまして申し訳ありません
当社 レクメモです。
(本日会)

プラント状況(本店レク) 議事メモ

日時：平成23年4月3日(日) 12:00~12:40

場所：東京電力本館1階101AB会議室

先方：記者約35名(カメラ6台)

当方：原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて(4月3日 午前10時現在)
- ・福島第一原子力発電所 1~3号機プラント状況
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況

質疑：

Q. 高分子ポリマーを投入することは、建築土木の社員専門家が止水できる方策と判断したのか。

A. 一つの方策として止水セメント、おがくずの投入等、他の策も含め検討しているところ。

Q. 漏水している量は測定できないのか。

A. 把握していない。

Q. 放射性核種の分析は。

A. 確認中。

Q. 2号機タービン建屋の水の総量は。

A. 中の様子も含め、全体を把握できていない。

Q. 止水するための専門家は社員でなく、外部機関の協力を得ないのか。

A. まずは社内の専門家で対応している。

Q. 2号機の炉内への注水量を9トンから8トンに減らしたことでの漏水量の変化はないのか。

A. 漏水箇所が奥まった位置にあるので確認できていない。

Q. 高分子ポリマーやおがくずを投入した後に止水セメントで固めると言うことか。

A. そのように検討している。

Q. 昨日(4/2)コンクリを流しこみ、失敗したことについて、現場からのどのような情報とともに、どのような検討を行い、誰が最終的に判断して実施・失敗したのか。判断に専門家が加わっていたとしたら大量の水があるところにコンクリートを流し込んでも意味がないことぐらい分かるのではないか。

A. 確認させていただく。

Q. 今後、水が止まらなければピット内のコンクリートを出して調査する必要があると思うが、どのように出すつもりか。

A. 確認させていただく。

Q. 止水用コンクリートがあるとのことだが、昨日使用したのは止水用コンクリートか。もしそうだとしたら、昨日なぜ使用しなかったのか。

A. 確認させていただく。

Q. 2号機T/Bへ設置したカメラはどこに設置しているのか。また、監視カメラを設置した際に測定した線量を教えていただきたい。

A. 確認させていただく。

Q. 高分子ポリマーのメーカー、製品名は。

A. 確認させていただく。

Q. タービン建屋の床面積を教えていただきたい。

A. 確認させていただく。

Q. 核種分析に何日もかかってしまっていることについて統合本部に相談しているのか。政府と協調していれば各機関で手分けして分析を急ぐべきではないか。

A. 確認させていただく。

Q. ヨウ素の量だけでも先に公表できないのか。

A. 確認させていただく。

Q. 出口部分で止水に成功したとしても、大元と思われる立坑やタービン建屋内の溜まり水は増加するのではないか。

A. 建屋内の水量が増加する可能性はあるため、排水に取り組んでまいりたい。

Q. タービン建屋の溜まり水とトレチの溜まり水はつながっていると考えて良いか。

A. 可能性は高いが、あくまで想定しているもの。

Q. 各号機のトレチの距離は。

A. 確認させていただく。

Q. 原子炉への注水は現在8トン/丘か。

A. 仮設電源から外部電源に切り替えるにあたって一時的に止めたりするので、その時間等も含め分かり次第お知らせしてまいりたい。

以 上

記者会見概要

日時：平成 23 年 4 月 3 日（日）17:35～18:35

場所：東京電力本館 3 階 A B C 会議室

先方：記者約 70 名（カメラ 10 台）

当方：原子力・立地本部 [REDACTED]

原子力運営管理部 [REDACTED]

原子力設備管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

配付資料：

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて（4月3日 午後4時現在）
- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所仮設モニタリングポストによる定点計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所 1～3号機プラント状況

質疑：

Q. タービン建屋の復水器の水を抜く作業が終了し、作業員が入れるようになるまで、どのくらい期間かかるか。

A. 復水器の水を復水貯蔵タンクへ移送する作業に数日、タービン建屋の水を復水器へ移送するのにも数日かかり、その後、水を抜いた後、作業員が入ることができる。

Q. 残留熱除去系のラインが回復する見通しは。

A. 放射線量のサーベイを行い、もう少しかかると思う。そこまでがタービン建屋であり、残留熱除去系のラインは原子炉建屋内なので、もう少し期間としてはかかる。

Q. 本日、細野補佐官より実際に放射性物質の外部への放出が止まるという状況まで数ヶ月かかるという見通しであると聞いたが、残留熱除去系のラインが復旧する見通しがそれくらいと考えてよいか

A. 残留熱除去系の復旧の見通しは具体的にはわからないが、早急に作業を実施していく予定である。

Q. おが屑、高分子ポリマー、新聞紙を投入した方法と状況を具体的に教えてほしい。

A. 細い管路の入り口のトレーナーのコンクリートを崩し、穴を開け、そこにおが屑をいれて、3kg入りのものを20袋投入した。ポリマーに関しては80袋分を投入した。新聞紙については、ちぎった新聞紙を3袋分いれたと聞いている。そこでうまく入っていくようにバイブレーターという機械で搅拌している。

Q. 避難者への補償案は具体的に何か考えているか。

A. 原子力賠償法に基づいて考えているが、まずは事故の収束を第一に考えているが、具体的には決まっていない。

Q. 今回のような深刻な災害への対策・ガイドラインなどはあるのか。

A. 今回のように交流電源が喪失する、非常用炉心冷却系が全て使用できないなどの場合に号機間融通する、消防車等の代替注水手段で原子炉を冷やす等のシビアアクシデント対策はあった。しかし今回、これ程までに事故が大きくなつたことは、1から4号機まで同時に被害を受けて、海水系のポンプが使えなくなつたことと、水素爆発により周囲の放射線量が高くなり作業環境が悪くなつた等が、時間を要している要因であると考えている。

Q. トレーナーのコンクリートを外したのはピットから何mの地点か。増えた後はどの位の量になるのか。

A. ピットから約22mと聞いている。数千倍に膨張することは把握しているが、どの程度膨れるかという結果については評価できていない。

Q. ポリマーの製品名はとメーカーは何か。

A. IBダイワのウォーターゲルパックである。(その後、中村建設の水ピタへあることを修正して発表済み)

Q. ピットへの投入の完了時間は。

A. 13:47～14:30の間で作業を行つた。

Q. トレーサーを入れたことで2号機のタービン建屋の地下に出てくる可能性は。

A. 立坑からトレーサーを投入し、取水口から出してくれれば、トレーナーになまつ

た可能性としてはある。入り口と出口に時間を計つておけば、どの位で水が流れ出るかが分かるものと考えている。

Q. 今回の手段がだめだった場合は。

A. 様々な手段を考えているが、管炉の周辺に即効性のコンクリートを注入して地面ごと固めるということも検討していて、その準備も進めている。

Q. トレーサーを本日、再度入れる予定は。

A. これから夜になるので、現時点では本日入れる予定はない。

Q. ポリマーは1袋で何gか。

A. 1袋は100gで80個分、合計8kg投入した。

Q. 武藤副社長から原子力・立地本部の [] に変更した理由は。

A. 新たに広報担当として [] を据えたもの。

Q. 武藤副社長の健康状態が悪いということではないのか。

A. 今も対策本部で陣頭指揮をとっている。

Q. 清水社長は入院中なのか。

A. そうである。

Q. 4号機の集中環境プロセス施設に汚染水を入れていいのか。

A. 4号機のたまり水の線量としては低いからである。

Q. 細野首相補佐官が今朝のテレビ番組出演後のぶら下がりで、事故発生直後にはメルトダウン寸前の危機的状況や格納容器の破断という状況を脱したと言ったが、東京電力よりそのような説明はなかったが、どうか。

A. 細野首相補佐官のご発言は詳しく拝聴していないので、回答は難しい。

Q. 発電所には1,000mSvを超える線量計を持っていないのか。

A. 確認させていただきたい。

Q. 枝野官房長官の会見の発言で放射性物質の放出をとめるにはオーソドックな方法だと何ヶ月かかるといっていたが、東京電力としてはどういう認識か。

A. 何ヶ月かということは具体的には申しあげられない。事態の収束に向けては、最終的に除熱系を使った冷却方法にきりかえていく。

Q. どういった活動をするのかなど、全体の工程表などが必要だと思うが、そういうといったスケジュールを示していただけないか。

A. 検討させていただく。

Q. 外部電源に切り替えることができたことによるメリットは。

A. ディーゼルエンジンの使用が不要になり、燃料の補給作業が不要になることが一番のメリットである。

Q. GE社のペント会長が来社したと聞いているが、フランスのアレバ社がしたような具体的な対策などは何か考えているのか。

A. GE社のペント会長は本日、当社を訪問しており、勝俣会長・武藤副社長が対面しており、1号機のBWR型の製造メーカーとして対策の立案を行っていただけだと聞いている。火力の増設などの要請についてもご了承いただいた。

Q. 今回の写真の水量をみれば、生コンクリートを注入することは間違いであるとわかるはずだが、どのように情報伝達がされ、誰が注入を判断したのか。

A. 判断した場所にはいなかつたので回答はできない。

Q. 漏水発見から今回のコンクリート注入にいたるまでの情報伝達はうまく行われているのか。

A. 伝わっていると認識している。判断としては、なるべく早く止水することを第一に考えていた。コンクリートの中でもできるだけ固まっているものを使ったほうがいいのではないかなど検討したとは聞いているが、詳細は確認させていただきたい。

Q. ピットへの漏水への対策をした結果の感想と認識は。

A. 現状、水は止まっていないが、全力でやっていきたい。

Q. ピットからの漏水が終わるまでにどれくらいの期間が必要になると認識しているか。

A. 明確にはないが、早急に漏水を止めていきたいと考えている。

Q. トレンチに空けた穴の大きさは。また、管路の大きさは。

A. 約 1m × 1m の大きさの穴をトレンチに空けておが屑等を投入した。管路は横 1.1m、縦 70~90cm である。電線管は直径約 10cm で、横に 5 列、縦に 3 列の 15 個入っている。

以 上

プラント状況（本店レク）議事メモ（案）

日時：平成 23 年 4 月 3 日（日）23:10～23:45

場所：東京電力本館 1 階 101 A B 会議室

先方：記者約 50 名（カメラ 6 台）

当方：原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

・特になし

高分子ポリマーに関する訂正説明後の質疑応答

質疑：

Q. ウォーターゲルではなく水ピタを使用した理由は。

A. 詳細は把握していないが最終的に判断して使用した。

Q. ポリマー等の投入に効果がなかった場合の次の選択肢は。

A. 例えば、ピット周辺の地面を薬剤で固めるなど、水を通りにくくすることが考えられる。

Q. コンクリートがあつて出来ないのでないか。

A. ピットの脇の地面等に実施することでも効果が得られると考えられる。いずれにしてもいろいろと検討していきたい。

Q. トレーサーは投入したのか。

A. ■より先の会見で、早ければ今晚とのコメントもあったが、暗くなつたこともあり、最速で明朝なのではないか。

Q. 最後に漏水を確認したのはいつか。

A. 19 時の段階では変化がないことを確認している。

Q. 現時点では漏水が止まっている可能性はあるのではないか。

A. 現時点ではそのような内容は聞いていない。

日時：平成23年4月3日（日）23:50～25:55

場所：東京電力本館1階101AB会議室

先方：記者約50名（カメラ6台）

当方：原子力設備管理部

本店広報部

配布資料：

- ・福島第一原子力発電所プラント状況等のお知らせ（4月3日 午後6時現在）
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所1～3号機プラント状況

質疑：

Q. 2号機にカメラを設置する際の線量計測時間は。

A. 確認する。

Q. モニターを離れたところに設置したことだが、具体的な位置関係について教えてほしい。

A. 確認する。

Q. タービン建屋で浸水しているエリアの床面積を示してほしい。

A. お示しできず申し訳ない。

Q. 放水量とは具体的にどのような数字か。実績も示してほしい。

A. 使用済み燃料プールに向けて放水した水の総量。

Q. 電源トレチのケーブルの総延長距離は。

A. 確認して回答する。

Q. 行方不明社員は津波がくることがわかっていてタービン建屋に行ったのか。マニュアルに沿った行動だったのか。

A. 現在事実関係を確認しているところ。

Q. 津波警報が出た際に、屋内にいる人の行動マニュアルはどのようにになっているのか。

A. 確認させていただく。

Q. 福島県で子会社の方々に取材したところ、子会社の方々は地震・津波の発生後に外出るように指示を受けたと言っていた。子会社と親会社で行動が異なることはあるのか。

A. ルールは共通だと思う。当直長等が外に出るように言うと考えられるが、放射線管理区域外に出るのか、建屋の屋外に出るのか、いろいろな受け止めがあると思うが、いずれにしても確認する。

Q. 3月31日に提出した供給計画は、津波被害前の状況のまま提出されたとの情報があるがどうか。

A. 津波以前にとりまとめた情報で提出させていただいている。

S Q. 3月26日に福島県が1F7, 8を外すように言ったようだが。

S A. その情報は把握できていない。

Q. 供給計画を提出すると、その通りに事業を進めなければならないのか。

A. 詳細は承知していないが、津波による影響を把握したうえで再提出ということもあるのではないか。

Q. 2号機のトレーナーには2850トンの水があるという情報があるが、どうか。

A. 把握していない。

Q. メガフロートに入れるのは4号機の排水ということでいいか。

A. メガフロートの用途に関する選択肢の一つ。具体的な使用用とはこれから検討する。

Q. 原子炉建屋に注水した水の量は。

A. 2日正午時点で 1号機 5700トン、2号機 9300トン、3号機 9000トン。

Q. 先ほど聞いた、2号ピットでの線量が1000mSv以上を計測ができる機械を持っているない事の件についてどうか。

A. 発電所では1000mSv/h以上計測が可能な機器もあるが、発電所で通常のサーベイで使用する機器の測定範囲が1000mSv/hまでとなっており、測定結果が1000mSv/h以上であった場合は、「1000mSv/h」とお知らせさせていただいている。

S Q. 発電所でお持ちの機器の商品名や品番を教えてほしい。

S A. 確認する。

Q. 2号機タービン建屋の溜まり水や、立坑など1000mSv以上を計測したところがあったにもかかわらず、線量が高いことが予想できる場所に行く際に、なぜ1000mSv以上計測できる機器を持って行かないのか。

A. 把握していない。

Q. 昨日コンクリートを注入すれば止まると判断した責任者は。

A. その時に発電所と連携しながら判断している。

Q. 責任者が誰かわからないという状況か。

A. 責任者は本部長となるが、場面場面で交代していることもある。

Q. 統合本部で決定したのではないか。統合本部であれば責任者は菅首相であると思うがどうか。

A. 確認させていただく。

Q. 集中環境施設は建屋全体を使って排水を受け入れるのか。

A. 3万m³程度の水を建屋全体に入れられると考えている。

Q. 2号機タービン建屋立坑にカメラを設置したが水位等の最新データはどうか。

A. 新しい情報は入手していない。

Q. ピットから出てくる水を止めるのは何人体制で行ったのか。

A. 確認できていない。

Q. ピットへのコンクリート注入は具体的にどのように行ったのか。

A. 確認させていただく。

Q. 次の策として言っていた、ピットの周囲にコンクリートを入れる方法については、

管路の周囲は固まっても、管の中に対しては有効と思えないが、どうか。

A. 確認させていただく。

Q. 海への流出が続いている、核種分析も確認中とのことだが、せめてヨウ素の値だけでも出していただけないだろうか。

A. ご意見として賜る。

以 上